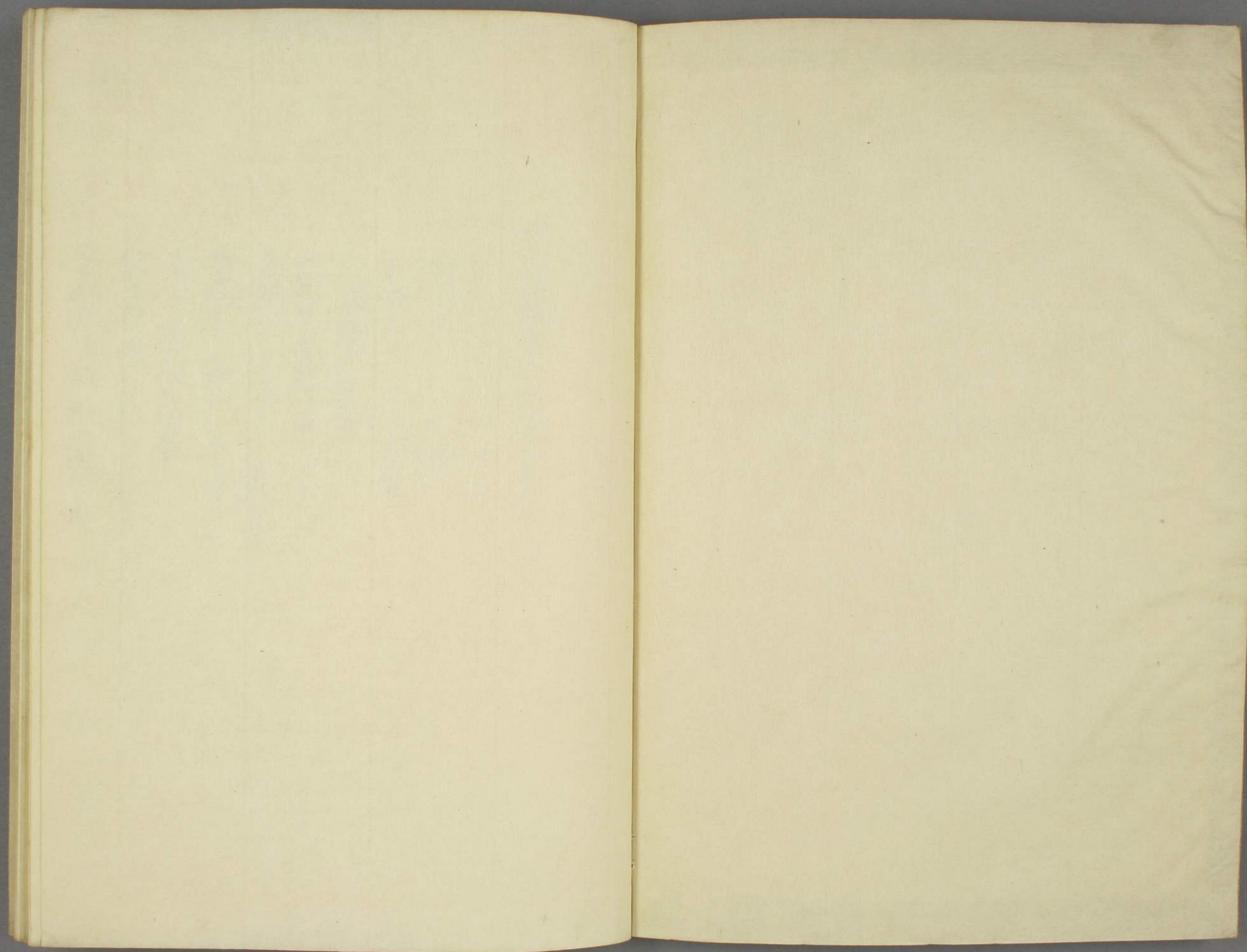


平家物語考證

十

U 5
814
10





門 95
號 814
卷 10



平家物語考證目錄卷十

- 才一 へいむくのり
- 才二 内程女をうたふ事
- 才三 ハツおんせん乃事
- 才四 うけぬ事
- 才五 りん乃事
- 才六 くのり乃事
- 才七 せん乃事
- 才八 よこあえ事
- 才九 かろの事
- 才十 くれりの出家の事

平十一 之海のきんけいなり
 平十二 これりり入あり事
 平十三 三百平氏のり
 平十四 ありとのり
 付り 大志やゝのきん

平家物語考證卷之十
 松堂閑人四醉生
 洛陽後學源道格集
 羽林中郎將藤原定俊補

平家物語考證卷之十

松堂閑人四醉生

洛陽後學源道格集

羽林中郎將藤原定俊補

ふひまうしれ事

壽永三年二月十日或秘記云入夜藏人右衛門權佐
 定長來仰院宣云平氏首不可被渡旨思食而九郎
 義経加羽範頼申云被渡義仲首不被渡平氏之条
 太以無其謂何故被惜平氏哉之由殊鬱申云此条
 如何可計申者申云論其罪科与義仲不異又為帝外
 戚其身或昇口相或近臣雖遂誅伐被渡首之条可

謂不義近則信賴口頭所不被渡也加之神室寶劍猶
在殘之賊乎無為歸來之奈第一之大事也若被渡此
首者彼賊亦弥令勵惡心欲仍旁不可被渡其首將軍
亦只一旦申所存欲彼仰子細之上何強執申哉賴朝
定不承申此旨欲此上左右可在勅定者定長云被問
左大臣內大臣忠親口亦各申不可被渡之由一同云
以下錄下段○十一日記云及晚頭參院平氏誅罰之
間人々多參入云余依所勞于今所違也八條院御同
宿也以定長入見恭仰云彼岸之間依念誦無暇仍不
謂所勞之由間食不恭同事也世上事迷成敗了雖自
今以後被發仰事無纖芥不可申也抑平氏首事申間

可然又人々同申不可被渡之由而將帥亦殊鬱申其
上強又不可及護惜仍仰可渡之由云申畏承了之
由又聞平氏之許遣書札通音信之人不可勝計王候
口相以下貴賤上下大都洛人無殘輩就中院近臣甚
多云余雖聞此事敢不相驚一切無此恐故也以之思
之貞直之道庶而猶可庶者欲○十三日記云此日被
渡平氏首共數公口頸不可被渡之雖有其儀武士
猶鬱申云如何通盛口首同被渡了可彈指之世也○
十九日記云傳聞平氏歸住讚岐八嶋其勢三千騎計
云被渡之首中於教經者一定現存云又聞資盛貞能
亦為豐後住人亦乃生被取了云此說日來雖風聞人

不信受之處事已實說云

平氏の乞はるけり云

補軍將凱旋ノ日檢非遣使ニ首級ヲ授ルコト土

記中右記等ニ出タリ東洞院ハ西洞院ナルベキ

カ左獄ハ近衛西洞院ニアリ

たゞり女回り此事

同二月九日記云今日三位中将重衡入京着褐直垂

小袴云即禁固土肥二郎実平頼朝即從○十日記云

定長又語云重衡申云書札副使者重衡良遣前内府

之許乞取劔至可進上云此事不可叶誠任申談可御

覽云餘者録○廿九日記云九郎為追討平氏来月一

覽云餘者録

○廿九日記云九郎為追討平氏来月一

日可向西國由有議而忽延引云或人云重衡所遣

前内大臣許之使者此兩三日皈恭大臣申云畏承了

於三ヶ宝物并至上女院八条殿之以仰可令入洛於

宗盛者不能恭入賜讚岐國可安堵御供ニハ清宗ヲ

可令上洛云此事實若因茲追討有猶豫歟

三月一日記云定長語云重衡所遣之使者左衛門尉皈

叅又有消息之返事申狀大畧庶和親之趣也所詮源

平相并可被召仕之由欵此条頼朝不可承諾然者難

治事也但此上於別御使来之時奉子細了可申所存

こ八より此車の云

補裝束抄云淺官外記史等ノ輩モ小八葉ヲ用ル
ナリ但シ下輩ハ物見切サル事也云

水蘭地の虫

水蘭地見第二卷直垂見第一卷

赤衣

朱袂赤衣事也多紅ニ黄字あり後より文不同裏
平絹色延尉彈正ハ黄裏五位外記史ハ蕪芳裏也夏
ハ鶯物色文ホ冬ハ同官外記ハ入らむとて袍の丸
右のらん此ありと申へおし入る思ひて尚職の程
ハ恙あり他官儀
おぼるのゆつそ

補院宮ニ召次所アリ召次ハ内豎ニ同シ花形丸
ハ小舎人童ニテ御臺ニ伺候スルモノカ今大丸
カ類ナルヘシ

三位中納の使ハ平三友門主子

見或秘記三月一日記註上

末代落りくの帯云々

補末の落りくの帯やその申れたるき先ら帯ありぬん

見于詠歌大概

民マハ入乃ちウのりれむすめ

補親範ハ從三位平範家ノ子ナリ系圖ヲ考ルニ
親範ニ女子見ヘズ

西の海見せんの事

ろろの事云々を云々

補未考得

うけ文の事

それ日月ハ云々

補按ニ平氏答報ノ書物語東鑑各別ナリ玉葉ノ記スル趣キ又殊ナリ事實ヲ論スルトキハ東鑑ヲ正トスヘシ物語ノ所記モ文詞甚タ正シク健カナリ作者ノ偽造トハ見ヘス玉葉ノ記スル所ハ只傳聞ノミ然トモ是時ハ嶋へ院宣ヲ下スト云ニハアラズメ重衡ヲシテ朝儀ヲ達セシムル

モノカ何レカ是ナルコトヲ知ラス

皇の谷れらう秘んをう

補元亨釋書云款源空姓添氏作州人云源空ハ名ニメ法然房ハ所居ノ名ナリ

ころにたつたけり

補佛書ニ次第乞食等ノ法アリ頭陀ハ抖擻ト翻ス萬事ヲウチハラヒテ執着セサルノ義ナリ

志也

補須彌名義集唐言妙高

とちん

補少數微塵等名義華名嚴經等ニ詳ナリ

うけつて人牙

補四教儀等ニ云ク修中品善者ハ人中ニ生スト

云ク

せうきうとひつて云ク

補阿彌陀經云執持名号云ク

せんせうとやううう云ク

補專称名号至西方ノ文禮讚日中偈

祇んくせうとやう云ク

補念々稱名常懺悔ノ文般舟讚

マルんそくせ云ク

補利劔即是弥陀号ノ文同上

三こうはいぎ

補身口意ノ三業行住坐卧ノ四威儀ヲ云佛書ニ

詳ナリ

件乃硯ハ云ク

補今マ知恩寺ノ秘蔵トス

ういそくをうへるに事

と程よ中三位中ね重衡の口をハ謙倉此前の兵出此
依頼給志きうりよ下さきれハさうハ下さる人トて土
礼の下実早々より九節正さうハ此者ハ人トて甲
き三月十日此日梶原平三宗時より智よりまきハ実東ハ
丁地下よりまきら白

元暦元年三月十日或秘記云今日重衡下向東國頼
朝所申請云々

同三月二日東鑑云三位中將重衡卿自土肥次郎實
平之許渡源九郎亭實平依可赴海西也○十日記云
三位中將重衡今日出京赴關東梶原平三景時相具
之是武衛依令申請給也

鳥人を身以此皇おろす

補按ニ仁明天皇第四皇子人康親王出家シテ山
科ニ退隱ス故ニ四宮河原ノ名アリ蟬丸トハ此
ヲアママルカ又博雅ノ三位ノ盲人ニ琵琶ヲ習
シハ水陸山ノ故事ナリ相坂ニハ非ス

わさやのこのさく

補新古今雜部をの甲ハそくもかてをれか
そんやそくもかてをれか
せくれくもかてをれか

補按ニ和歌ニ詠スルハ多ク勢多ノ長橋トアリ
唐橋ト稱スル例イマタ考ス欄干擬寶珠ハレル
ヲ唐橋ト稱スルトキハ其ノ結構ニ就テ云ナル
ハシ兼盛集ハ細相多ク備ふる東海此勢田の長を
そとくもかてをれか

ひそりあるまゝ云

補野路ニ雲雀ノ讀合セイマタ考ハズ勢多ニハ

元年遠江守に按ルニ平治元年十二月廿七日勲
功ノ賞トシテ遠江守ニ任ス時二十三歳ナリ遥
授ナルコトシカリ又翌年正月淡路守ニ任ス當
國ノ守タルコト僅ニ二十餘日ナリ物語ノ説信
シカタシ

さよ此中山よかまきふふも又こゆへーともおほく
縁ハ

西行法師之歌ニ

こゝと^れ縁^け又らゆアと^まむ^ひと^まい^のち^{あり}
りり依夜の中山

よら

補手越崎駿河ノ名所ナリ

ういれ^る禊

補雪子へぬ甲斐此白根と越行ハこゝみ^ゆれ^喜
の曙 名寄

こゆまきの表

補相模國小余綾磯名所ナリ

こいそ大いそ

補名寄ニ大いそのこいそれ浦のうら風よト云此ナリ

わらま

補八松ナリ尾つ松の八ふせの陰よ面をれてとら
みう泉に色もつら^ら 名寄

乙ウミウ京

補名寄相模ノ名所ナリ

尾ウミウ京

補同上

せんもれまの事

壽永三年三月廿七日東鑑云三品羽林著伊豆國府境節武衛令坐北条給之間景時以專使伺子細早相具可參當所由被仰仍伴參但明且可逐面謁之由被仰羽林云○廿八日記云被請本三位中将引藍摺直虫子於廊令謁給仰云且為奉慰君御憤且為雪父尸骸之耻企石橋合戰以降令對治平氏之逆乱如指掌仍

及面拜不屑眉目也此上者謁槐門之事亦無疑欣者羽林荅申曰曰源平為天下警衛之處頃年之間當家獨為朝廷之計昇進者八十許輩思其繁榮者二十餘年也而今運命之依縮囚人參入上者不能左右携弓馬之者為敵被虜強非耻辱早可被處斬罪云無纖介之憚奉問荅聞者莫不感其後被召預狩野云○同四月八日記又云本三位中将自伊豆國來著鎌倉仍武衛點郭内屋一字被招入之狩野众一族郎從等每夜十人令結番守護之○廿日記雨降終日不休止本三位中将依武衛御免有沐浴之儀其後及菜燭之期稱為慰徒然被遣藤判官代邦通工藤一臈祐經再官

女一人手前等於羽林之方刺被副送竹葉上林已下
羽林殊喜悦遊興移剋祐經打鼓歌今樣女房彈琵琶
羽林和橫笛先吹五常樂為下官以可為後生樂由稱
之次吹皇聲急謂往生急凡於事莫不催興及夜半女
房欲歸羽林暫抑留之而盃及朗詠燭暗數行虞氏淚
夜深四面楚歌聲云其後各歸參御前武衛令問酒宴
次第給邦通申云羽林云言語云藝能尤以幽美也以
五常樂謂後生樂以皇聲急號往生急是皆有由欣樂
名之中迴忽者元迴骨大國葬禮之時調此樂云吾為
囚人被誅條存在且暮由之故欣又女房欲歸之程猶
詠四面楚歌句彼項羽過吳之事折節思出欣之由申

之武衛殊令感事之體給依憚世上之聞吾不臨其座
為恨之由被仰云武衛又令持宿衣一領於手前更
被送遣其上以祐經邊鄙士女還可有其興欣御在國
之程可被召置之由被仰云祐經頻憐羽林是往年候
小松内府之時常見此羽林之間于今不忘舊好欣
るんたうハ云

補成湯夏臺ノ囚文王羨里ノ故事史記及帝王世

記等ニ見タリ

まていめいとよて云

補十王經ニ見タリ

めゆひのころ云

補カタビラハ一重ノ下着ナリ布絹ヲ用フ襷束
雜事抄ニ白キカタビラ老少トモニ用フト云コ
レナリ

そのつぎにゆきき いまきともいふゆききひあり

補染色ノ湯卷ナリ栄花物語ニ

ゆきとのいまだト云コレナリ

かこいあこめきけ

補女童ナレハ髪ノ長カラヌヲ云ナリ袖ハ裳ヨ
リカミ着ルモノナレバ腰ヨリ上ニ髪ノ末ノア
ルヲ云フ

ちんさうたひ

補髪ヲ洗フガタメナリ櫛ハ手洗ニ入ルベキニ
ハアラ子トモ沐スルカタメニ具メ来ルナリ盥
等ノ具類聚雜要抄ニ見タリ

あれいふこころ

補盛衰記白川宿ノ長者ノ娘トス

羅綺のま衣方情なきとて機婦子福む

管家題春姓無氣力詩之序羅綺之為重衣姑無情
於機婦管絃之在長曲怒不闕於伶人朗詠集註云
言羅綺者薄織之綾也美人力微猶為重衣是機女
無情而可謂厚織也又曰伶人主絃長久舞女弥可
瘦

十惡といふも狂のんせうは

後中書王讚極樂寺文雖十惡今猶引攝甚於疾風披
雲霧雖一念今必滅應喻之巨海納消露

あまやうらく

補五常樂平調

まうあやう

補皇慶章平調按ニ天寶ノ樂曲ナリ黃慶章ニ作ルベ

てんちやとわちうらく

補轉子ハ軫ヲ云々子箏ヲ彈ス重衡琵琶ヲ取テ
律ヲ和スル也

まうひらふらていさうらうらるん

橋相公賦項羽燈暗數行虞氏浹夜深四面楚歌聲○
項羽本紀曰漢王与楚王爭天下八年項羽勢盡隱城
下漢王軍四圍項羽々々夜深起飲帳中有后名曰虞
項羽歌曰我力拔山氣蓋世於時不利威勢廢虞姬兮
其奈何汝歌數回駕騅逃去漢騎追之項羽切漢二將
逐到江東自刎而死

中人

補重衡曾テ蔵人頭タリ依テ中人ト称スルカ是
時ハ三品羽林ナリ

先年あ此人と云

補平家花揃ト云古キ草紙アリ據ロアツテ撰ス

ルモノカ猶考フベシ

ふあゆれあひつるのさゆりん
はこそめあつまをあるの玉管光寺よりひすまうて
りのほせりといれさあひりり

文治四年四月廿五日東鑑云千壽前卒去年十四其性

大槩使人々所惜也前左三位中将重衡参向之時不

慮相馴彼上洛之後戀慕之朝夕不休憶念之所積若

為癸病之因歎之由人疑之云

補又云御臺所御方女房號千手前

よこふえの事

りく吹あけ衣通姫の神とあひまはる玉浮瑠璃の留神

有秘説

日箭玉懸社

古語拾遺曰素盞鳴神奉鳥為日神行甚无状于時天照

大神赫怒入于天石窟窟盤盤而出居乃六合常闇於

是從思兼神儀今石疑婉神錢錢曰像之鏡初度所鑄少

不合意是前紀伊國也次度所鑄其状美麗是伊勢勢余乃太

玉以廣原稱詞啓曰吾之所捧寶鏡明麗恰如汝命乞

開戸而御覽焉仍太玉命天兒屋命共致其祈禱焉于

時天照太神中心獨謂此吾幽居天下恙闇群神何由

命天手力雄神引啓其扉遷在新殿天照太神高皇產

靈尊乃相語曰天^大葦原瑞穗國者吾子孫可王之也皇
孫就而治焉宝祚之隆當与天^壤无窮矣即以八咫鏡
及草薙劔二種神寶授賜皇孫永为天^皇所^謂神^皇也即
勅曰吾兒視此宝鏡當猶視吾可^與同床共殿以為齋
鏡

補延喜神名帳云紀伊國名草郡日前神社國懸神
社

高野の山

補拾芥抄云金剛峯寺紀伊國弘法大師入唐之時
遙擲置三鈷之地也大師此處入定期慈尊出世
跡友たきくら時より

補魚名ノ流左衛門尉以頼カ子

さう

補諸記ヲ按ニ雜仕^{サテ}禊洗^{ヒスミ}ハ女中ノ賤隸ナリ

せいりょう

補集仙錄曰王母者龜山金母也云

東方朔

補前漢書ニ傳ヲ載タリ

せんちりき

補三種ノ善知識アリ法數等ニ詳ナリ

さゝのりう

補往生院念佛房ハ源空ノ門人ニメ念佛宗ノ一

派ナリ黒谷上人傳ニ見タリ三宝寺ト云小房今
ニ残レリ時頼法師が画像アリ所隠ノ房ナリト
云

布衣

補布衣ハ狩衣ナリ六位ハ布ヲ用フ五位ハ絹ヲ
用フ時頼ハ瀧口ノ侍ナリ布狩衣ヲ着セルナル
ヘシ

立烏帽子

補三光院記云立烏帽子ハ堂上一同着候地下不
着用候云風折立烏帽子同事ナリ三光院ノ記ス
ル所ハ後世ノ儀ナリ物語ニ於テ見ルベシ

髪

補髪アツクヲ出スナリ髪アツクヲ出サバルハ輕服
ノ儀ト云

ウラヤのまじの事

昔烏んさ此門云

補元亨釋書觀賢傳ニ延喜二十一年ノ事トス

むらさきの布衣

補釋書ニ紫衣トス共ニ非ナリ香染ノ衣ナルベ
シ

中納言すけさし

補公卿補任ヲ考ルニ延喜中中納言資澄ト云人

ナニ橘澄清ト云人アリ是ヲ云カサレドモ奉使
ノ事叔書等ニ見ヘス

けいそく(りやう)

補鷓足山大明一統志雲南ノ條下ニ出タリ

正入定ハ云

補空海卒去ノ事續日本後紀ニ詳ナリ

ふれり(り)此お家の事

ひ(り)ま(り)ま(り)ま(り)云

補繩麻ニ踏スルハ觀念靜坐ナリ又遺教經云初
夜後夜亦勿有廢中夜誦經以自消息云

志(り)け(り)ま(り)父云

補景康打死ノ事平治物語ニ詳ナリ

は(り)ん(り)こ(り)い(り)ち(り)云

補四句ノ文清信士度人經ニ出タリ得度ノ時必
ズ戒師ノ授クル文ナリ

そ(り)も(り)か(り)う(り)ま(り)と(り)い(り)ふ(り)云

補唐皮小鳥ノ名義盛衰記ニ出タリ怪異ノ説信
シ難シ猶考ヘアルヘシ

ふ(り)里(り)れ(り)ま(り)の(り)云

補千里岩代トモニ紀伊國ノ名所ナリ末を記ち
さとの(り)漢(り)又(り)日(り)の(り)名(り)々(り)々(り)煇(り)好(り)と(り)る(り)岩(り)代(り)の(り)松(り)蔭(り)塔(り)茶(り)
ふ(り)ぬ(り)の(り)さん(り)け(り)い(り)の(り)事(り)

いさ川

補岩田川紀伊國ノ名所ナリ

おとや川

補音無川并瀧同上

六えんけ

補法華懺法二六根懺悔ノ段有

神のうら

補神蔵山紀伊國ノ名所ナリ

三態神此倉山乃云々此有りそそり祈る式 續古今

さか松原

補佐野岡紀伊國ノ名所ナリ

花山此法皇云々

補栄花物語永延元年ノ下ニ花山院ハ了れ冬山

了て此交戒せき舟揚てそのちまのよほりせ給て

まくくらせを海いさんあり云々

あの夜れいすこ四位の少将云々

補玉葉云安元二年三月四日公家被奉賀太上法

皇五十寶算於東山御所世謂之法住公卿補任ヲ考

ルニ是時重盛大納言ノ右大将ナリ宗盛ハ權中

納言九衛門督ナリ知盛花中将ナリ重衡ハ左馬

頭中宮亮ナリ維盛嘉應二年任右近權少将兼安

三年叙従四位下是時四位少少将ナリ又玉葉云

補故事談長明發心集等ニ出タリ

七万うたうとらんり云々

補賢愚經ニ出タリ

又人びて百ふさいる云々

補僧祇律ニ出タリ

始む三あくしゆれん云々

補無量壽經ニ詳ナリ

三々めま六十万わく云々

補觀無量壽經ニ詳ナリ

うひうらるる云々

補按ルニ鉦鼓ヲ撃テ佛名節スル事經釋ニ所據

ヲ見ス或云空也上人ニ始ルト松尾明神ヨリ鉦

ヲ感得スト云々市屋道場金光寺ノ縁起ニ出タ

リ六波羅密寺ノ空也ノ像モ鉦ヲ頰ニ掛タリ○

参考太平記ヲ按ニ熊野人ノ口碑ヲ引テ曰紀州

牟婁郡有名麻繩要害處是維盛伴為入海逃匿之

地也云々子孫在紀州以小松為氏

三日平氏此中

昔あつた子云々

補名義集悲達唐言領古

あやのくとゆり云々

補名義集引西域記云太子出家令車匿牽提陁提

陟馬名又云車匿本是守馬奴名

四月一日改元乃て元暦と号す

元暦元年四月十六日或秘記云此日有改元事去年雖有其儀為即位以前不被遂之然而天下猶未靜之間即位又難被忘行踰年之後已及数月仍且依乱逆不可即位以前可被行也愚意猶未甘心 畧改壽永三年為元暦元年云々 依代始無赦令上曰元大臣云々

俊經 大應 弘治 大喜

兼光 元德 文治

光範 元暦 恒久 範寶

葉季 顯奉 應暦

壬日除目とこりて禰倉の前の右と云の依形正下此位也

同三月廿五日或秘記云自今夜被始行奉除目執筆
元大弁經房○廿八日記云見聞書無別事可為大除
目之由兼日謡哥而依頼朝申狀被止玆事ホ了云頼
朝叙正四下若定所望放將又雅被行放然者同可被
任平一官歟

補百練抄云源頼朝叙正四位下本從下天慶秀御

自六位叙四位之例也云々

同き三日の日崇徳院と律とありぬ云々
百練抄云元暦元年四月十五日賀茂祭也崇徳院并

宇治左府廟遷宮也件事公家不知食院中沙汰也仍
不被憚神事日也

わりのせんをー云く

補保元物語云新院ハ齋院御所ヨリ北殿へ迂ラ
セ給云白河殿ヨリ北河原ヨリ東春日ノ末ニ有
ケレハ北殿トソ申ケル

五月甲の日池の大納言光登の口園東へ下向云同き十六日池の大
納言光登の園東へ下向

考或秘記頼盛赴鎌倉者在壽永二年冬與此書及東
鑑異矣

壽永二年十月十八日或秘記云傳聞頼盛の逐電京

中又鼓騷云○向十一月六日記云或人云頼盛已來
着鎌倉唐綾直垂立烏帽子侍二人子息皆悉相具各
不持腰刀劔云頼朝白糸葛永早立烏帽子對面即
從五十人許群居頼朝後云其後頼盛宿相模國府去
頼朝城一日之行程云以目代為後見云能保宿惡禪
師家云去頼朝居一町許云此事為修行者說雅頼の
所往送也

元暦元年六月一日武衛招請池前亞相給是近日可
有歸洛之間為餞別也右典廐並前少將時家等在御
前先三献其後數巡又相互被談世上雜事等小山小
四郎朝政三浦丸義澄結城七郎朝光下河邊庄司行

平畠山次郎重忠橋右馬允公長足立右馬允遠元八
田四郎知家後藤新兵衛尉基清等應召候御前貴子
是皆馴京都之輩也次有御引出物先金作劔一腰時
家朝臣傳之次砂金一畧安藝公役之次被引鞍馬十
足其後召客之扈從者又賜引出物武衛先召弥平允
齋門尉宗清左齋門尉平家一族也是亞相下着最初
初尋申之處依病遲留之由被答申之間定今者令下
向欣之由令思案給之故欣而未參著之旨亞相被申
之太違亭主御本意云此宗清者池禪尼侍也平治有
事之刻奉懸志於武衛仍為報謝具事相具可下向給
之由被仰送之間亞相城外之日示此趣於宗清處宗

清云令向戰場給者進可候先陣而情案關東之招引
為被酬當初奉公致平家零落之今參向之條尤称耻
存之由直參屋嶋前内府云

六月九日池の大納言光盛の口於へりり給ふ

同六月五日東鑑云池前大納言被歸洛武衛令辞庄
園於亞相給上逗留之間連日竹葉勸宴醉塩梅調鼎
味所被献之又金銀懸數錦綺重色者也

大納言光盛の口於へりり給ふ

補公卿補任云五月日自關東入洛六月五日還任
同き十八日肥後守定能伯父平を入乃定次を記して伊賀伊
勢あまの友兵衛を江の島へ打ておきりり源氏殿向して

合致しと云

元暦元年七月八日或秘記云傳引伊賀伊勢國人亦
謀叛早云伊賀國者大内冠者源氏知行云仍下遣即
從ホ令居住國中而昨日辰刺家師繼法田入道是也乎平
為大將軍大内即從ホ悉伐取一又伊勢國信和泉守人
已下切塞鈴鹿山同謀叛云因此事院中物忘取喻無
物泰經作色只今事可出來之趣也云凡不能左右世
間也可彈指云○同廿日記云傳聞昨日伊賀伊勢謀
叛之輩出逢近江國与官兵合戰官軍得理賊徒退散
為宗者伐取一云天下大慶何事如之哉○廿二日記
云傳聞謀叛大將軍平田入道法師被梟首畢其外西

三人為大將軍者被伐畢云忠清法師家資小蔵山早
云又官軍之内大佐々木冠者不知被伐早凡官兵之
死者及數百云○又見東鑑七月五日及八月三日之記

坂戸の事

同き廿八日都は新帝即位なり神皇寶祕内傳不有く
所そく位此也い人王八十二代是と云めと承り

元暦元年七月廿八日或秘記云此日有即位事依治
曆四年例於太政官正應被行之抑相待劔皇歸來可
被遂行御即位哉否豫被問人々依攝政及左大臣ホ
申不備劔皇踐天子之位吳域雖有例我朝曾無蹠然
而依獻慮并識者ホ不知天意不測神慮可被行只以

目耳

西川より後戸云

補藤戸ハ播磨ノ名所ナリ

リの大とことさうころ

補是所ノ石今マ醍醐三寶院ノ前庭ニ在ト云

同八月廿一日除目とことりて大納軍瀧の冠者範於三河の当り冠者義経なる尉なるもつら候の宣旨と蒙つて九月朔及とせり

元暦元年六月廿日東鑑云去五日被行小除目具除書今日到来武衛令申給任人事無相違所謂權大納言頼盛侍従同光盛河内守同保業讚岐守藤能保參

河守源範頼駿河守廣綱武蔵守同義信云○同廿一日記云武衛召聚範頼義信廣綱等有勸孟次被觸仰除目事各令喜悦坎就中源九郎主頻雖望官途吹奉武衛敢不被許容先被奉申蒲冠者之間殊悅其厚恩

同八月六日或秘記云源中納言來數別言談畧又云明日可有除書九郎可仕官者

同八月十七日東鑑云源九郎主使者參申云去六日仕左衛門少尉蒙使宣旨是雖非所望之限依難被默止度々勲功為自然朝恩之由被仰下之間不能固辞
云此事頗違武衛御氣色範頼義信等朝臣受領事者

起自御意被奉申也於此主事者内々有儀無左右不
被聽之處遮企所望欵之由有御疑凡被背御意事不
限今度放依之可為平家追討使事暫有御猶豫云

同九月十日大為軍三河の吉範平家追討のよめと云 西五八卷

向云

同八月八日東鑑云參河守範賴為平家追討使赴西

海午剋進祭旗差旗卷一人弓袋一人相並前行次參

州着紺村濃直壘加次扈從輩一千餘騎並龍蹄所謂

北條小四郎 足利藏人義兼 武田兵衛尉有義

千葉介常胤 境平治常秀 三浦介義澄

男平六義村 八田四郎武者朝家 同男太郎朝重

葛西三郎清重 長沼五郎宗政 結城七郎朝光

藤内所朝宗 比企藤四郎能負 阿曾沼四郎廣綱

和田太郎義盛 同三郎宗實 同四郎義胤

大多和次郎義成 安西三郎景盛 同太郎明景

大河戸太郎廣行 同三郎 中條藤次家長

工藤一鶴祐經 同三郎祐茂 天野藤内遠景

小野寺太郎道綱 一品房昌寬 土佐房昌俊

以下也武衛攝御棧敷於福瀨河邊令見物之給云○
九月十二日記云參河守範賴朝臣去朔日使者今日
參着献書狀去月廿七日入洛同廿九日賜追討使官
符今日九月一日發向西海云

九月三日或秘記云早且範季朝臣來示不思戎事參
河國司範賴件男幼少之時範季為養育仍殊相親上洛問件事答不聞
不知之由有疑殆而手跡頭然猶不可不信歟

を江の西の任人依々本三行等統々少あへるい知らる云

同十二月七日平氏左馬頭行盛朝臣引率五百餘騎
軍兵構城郭於備前兒嶋之間佐々木三郎盛綱為武
衛御使為責落之雖行向更難凌波瀆之間瀆渴棠營
之處行盛朝臣頻招之仍盛綱勵武意不能尋乘船乍
乘馬渡藤戸海路三所相具之即從六騎也所謂志
賀九郎熊谷四郎高山三郎與野太郎橋三橋五等也
遂令著向岸追落行盛云

昔よりるぬ川とては津いのか目とてはるる海
を海より天竺表目をあつた我知ぬは希代のたゆなり
とて備前此小橋を依々本よふ備倉後の忠及あつと教
札云り

同十二月廿六日東鑑云依々木三郎盛綱自馬渡備
前國兒嶋追伐花馬頭平行盛朝臣事今日以御書蒙
御感之仰其詞云 自昔雖有渡河水之類未聞以馬
凌海之例盛綱振舞希代勝事也云

大當倉の汐汰の事

同十二月廿八日都よハ又除目をこらりて九つ判及義經六位の
源よなきさきく九希たま判及とそ中なる

十月廿四日東鑑云因幡守廣元八月十日申云去月十八日源廷尉叙留今月十一日聽院內昇殿云其儀駕八葉車扈從衛府三人共侍廿人各所於庭上舞蹈撥劔笏參殿上云

十月三日此日新帝此御禊の仍幸ありたり
三日當作廿五日○元曆元年十月廿五日大嘗會御禊也

同き十八日大嘗會のここととこあり
當十一月十八日○元曆元年十一月十八日或秘記云此日踐祚大嘗會也

